

ICIS2006 に出席して

杉野 隆
国土館大学情報科学センター

2006年12月10日～13日に、米国ウィスコンシン州ミルウォーキーにおいて、ICIS2006が開催された。情報システム学に関する国際会議であるICISに参加したので、ICIS、発表論文などについて紹介したい。

1. International Conference for Information Systems (ICIS) とは

IS 関連の研究者・専門家たちの国際的な研究発表の場として1980年に発足したが、2001年からはAIS (Association for Information Systems; <http://plone.aisnet.org/>) が主催している。2006年は第27回ということになる。AISは1994年にIS分野の専門家を世界的に組織化し、ProfessionalとしてのMISの確立を目指すために設立された。論文誌MIS Quarterlyの発行、研究発表会の主催などを行っている。米国、欧州、アフリカ、アジア太平洋の3地域に、地域学会としてそれぞれAMCIS、ECIS、PACISを設立している。また、各国にLocal Chapterを設けることができ、日本にはJPAISがある。

ICISは、毎年クリスマス前に開催されている。12月は、翌年6月の卒業を控えて、博士課程の学生がPh.D取得のために取り組んでいる論文を中間発表し、卒業後の就職先を見つけるに適切な時期である。そこでICISは、研究発表の場とともに、PlacementとDoctoral Consortiumという場を提供している(このような場は、ACM関連の他の学会でも提供している)。

AISは、情報システム関連の学生の大学への就職活動を支援するために、博士課程学生と大学教員とのマッチングサービスを行っている。50ドルの登録料を払えば、データベースに登録できる。ICIS期間中のPlacementは、これらの学生が全米のIS関連学科の教授たちと直接面接し、自らの研究分野、研究論文を説明し、また教授たちは彼らの学問の将来性を判断して、採用可否を決める場となっている。4日間の大会期間中開催されている。

Doctoral Consortiumは、大会直前に開かれ、博士課程の学生が作成中の研究論文を“中間”発表し、さまざまな意見をもらう場である。今年は、12月10日に開かれた。

また、研究発表でも、Completed Research Paperばかりでなく、Research-in-Progressの発表があることにも、この大会の狙いが伺える。

2. 発表論文の種別

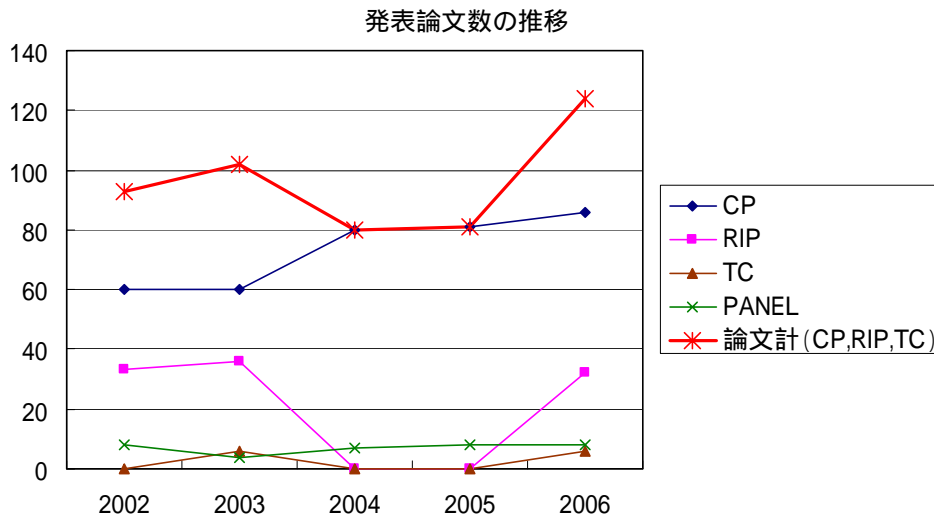
- Complete Research (CP) は、査読付き full paper である。
- Research-in-Progress (RIP) は、現在研究中のテーマに関するいわば中間発表であり、研究目的、方法論、研究ステータスなどを報告する。
- Teaching Case (TC) は、実在企業のISについて記述された教材(ケース)であり、実際にMBAコースなどにおけるケースメソッドで使用されるもの。当該企業の状況説明、情報システムの記述だけでなく、Teaching Note(教授方針、アサインメントの例、分析や演習の手順、演習の実施結果、lessons learnedなど)も記述される。

3. 今回の特徴

- 今回のテーマは『IT for Under-Served Communities』(ITを提供途上コミュニティのために)であった。参加者は34カ国から1,130人ほど(登録者数は1252人)であったが、全米50州中45州から参加があり、海外からの参加者は25%(中国、インド、韓国が目立つ)、学生の参加は34%だったとのこと。登録者リストから見ると、大学以外の参加者(不明分を含む)は4%程度に過ぎず、academicに極端に偏っていることがわかる。日本からの参加者は、私を含めて3人と思われる。次回ICIS2007は、カナダのモントリオールで、12月9日～12日に開催される予定。
- 今回の発表件数の内訳は、論文124(CRP:86, RIP:32, TC:6)篇、パネル:6件であった。下のグラフに示すように、論文件数は近年で最多であった。論文の採択率は18%であり、例年に比べ、高かったという。そのため、論文の総体的なできはあまりよくなかったとも言われている。その因果関係は不明であるが、確かにおや!という論文もあった。
- RIPとTCはしばらく採用がなかったが、今回は復活した。この会議の特徴でもあり、よいことだと

思う。

- ・ 定量的研究方法のセッション QUANTRM が独立した。4 篇の発表があった。他のビジネス関連の学会が定量的方法に重点を置いているのに対して、これまで ICIS ではこのアプローチを避けてきた。IS の研究方法を長期的に変えるともいえよう。



4 . プログラム

セッションの構成

略称	セッション名称
BI-IT	Breakthrough Ideas in Information Technology
DS	Decision Sciences
ECONIS	Economics and IS
EPI-IS	Epistemological and Philosophical Issues in IS
GITM	Global Information Technology Management
GTOPICS	General Topics
HCI	Human-Computer Interaction
ISDEV	Alternative Approaches to Information Systems Development
KM	Knowledge Management
PANELS	Panels
QUATRM	Quantitative Research Methods
SBIOS	Social, Behavioral and Organizational Aspect of Information Systems
SECAS	Security and Assurance
TCASES	Teaching Cases
UNDSVCOM	IT for Underserved Communities
VITOPP	Valuing IT Opportunities
WBISA	Web-based Information Systems and Applications

スケジュール

次をご覧ください。 <http://www.icis2006.org/Program.htm>

5 . いくつかの論文紹介

発表された論文のうち、私が聴きあるいは予稿集を読んで興味があったものを二三紹介する。いわゆる ISらしい論文が多いのはもちろんであるがICISの幅の広さを示すために、そのような例を示す。

FAILURE TRAP:CYCLICAL FAILURES IN IS IMPLEMENTATION

(失敗のわな：IS実施における失敗の繰り返し)

Hsiao Ruey-Lin シンガポール国立大学・アジア太平洋ロジスティクス研究所

ISの失敗の原因は複雑化しているが、ISの失敗を組織の社会的歴史的脈絡においてみる必要がある。ISの失敗については、これまでに様々な研究がなされているが、Lyytinen と Hirschheim は、correspondence の失敗、process の失敗、interaction の失敗、expectation の失敗の四つ原因がある

という。そして、C. Sauer はそれを批判して、依存の三角形モデルを提唱した。また、IS の失敗が繰り返し発生する原因には組織学習の崩壊があるという。Lyytinen と Robey は、組織知能の限界、学習意欲の喪失、不適切な組織設計、教育の障壁の四つを挙げている。これらの学習機能の不全によって、組織は IS プロジェクトに繰り返し失敗するわなに陥ってしまう。プロジェクトの失敗から十分な経験を学ばずに次のプロジェクトに取り掛かり再び失敗してしまう。本論文では、1989年 - 2003年の間に5回にわたってプロジェクトの失敗を繰り返すという台湾のある食品関係企業を対象とする。同企業の関係者9名に面談(1回1.5時間ほどで延べ131回)した結果をもとに、文脈分析することによって、社会的組織的文脈から組織の急激な変化の歴史を分析し、組織の文脈、技術と組織変更の内容、実施プロセス、そしてISの失敗につながる“失敗のわな”の概念を解釈学的に分析している。繰り返し失敗するという悪循環を断ち切るには、組織学習の機能不全を学習することが必要であったと示唆する。1社のみでの分析で一般化するのは無理ではないかとのコメントがあったが、1社内で繰り返し発生しているわけであり、分析の価値はあるとのこと。SBOISセッションの文献賞を受賞。

THE MODERATING ROLE OF PERCEIVED REGULATORY EFFECTIVENESS OF ONLINE MARKETPLACES ON THE ROLE OF TRUST AND RISK ON TRANSACTION INTENTIONS (取引意図における信頼とリスクの役割から見たオンライン市場の認知された規制有効性の仲介の役割)

David Gefen ドレクセル大学ルポー経営大学院

Paul A. Pavlou カリフォルニア大学リバーサイド校アンダーソン経営大学院

信頼は第三者に対する期待である。取引行動においては、信頼は積極的な効果、認知されたリスクは否定的な効果をもたらす。しかし、N. Luhmann の言うように、信頼は社会的不確実性を縮減するものであるが、この不確実性は社会構造に依存する。本論文では、eBay と Amazon のオンラインオークション市場を事例として、信頼と認知されたリスクを、社会的文脈から検証する。オンライン市場では、購入者は市場に有効な規制があると期待するが、その度合いが購入者の取引行動に影響を与える。ここでは、購買者と販売者の市場における調整機能を規制の有効性という。取引意図は、その市場において信頼から受ける影響の度合いと、購入者がオンライン市場の規制をどの程度に有効に認知するかに依存する。オンラインオークション市場の参加者へのアンケート調査をもとに、多変量解析を行った結果、次の仮説が検証された。

仮説1 市場の認知された規制有効性と購買者の取引意図への影響とは、逆U型(上に凸)の関係にある。購買者が認知する規制有効性レベルが低から中であれば、増加するにつれて信頼は増加するが、規制の有効性が中から高に増加するにつれて取引の不確実性が低減し、信頼に依存する必要が減少する。

仮説2 規制の認知された有効性が増加すると、購入者が受ける認知されたリスクの影響は減少する。このような研究は、ISの研究ではなく、心理学や社会学などの他の分野でのものではないかとの質問があったが、この対象となっているオンライン市場はまさにISによって成立する世界であり、ISの社会的影響として分析されねばならないとの回答であった。私も同感である。

パネル討論 DOES IT MATTER IN CORE MBA EDUCATION? PERSPECTIVES FROM BUSINESS SCHOOL DEANS (MBAのコア教育においてITは重要か? ビジネススクール学部長たちが語る見通し)

司会 : Vasant Dhar, New York University

出席者 : Arun Sundararajan, New York University

Panelists : Maryam Alavi, Emory University

Nicholas Carr, Independent consultant and business writer

Howard Frank, University of Maryland

Vijay Gurbaxani, University of California-Irvine

情報技術は生産性向上の重要な原動力であり、企業がITを効果的に使うか否かが企業の成果に重要な影響を与える。ITを活用するためには、ITを使用するビジネスモデルと組織戦略を開発する必要があるが、マネージャたちが技術的な意思決定を合理的にできないことが、多く見られる。したがって、ITに関する授業はMBAのコア科目に当然含まれると考えられてよいはずだが、ITに関するコースワークはMBAプログラムの重要な部分にはなっていないし、開講されていても、新し

い話題を取り入れたコースを全く提供していない。そのうえ、IT をコア科目の一部として取り扱っているビジネススクールの学部長の多くは、満足できる講義ができていないとは思っていない。ほとんどのビジネススクールが、ビジネス IT に関するコースは、原則的に重要科目であるとしているが、多くの教員は実際には教育方法について苦戦している。

NYU のスターンビジネススクールでは、コアコースは主要な課題に合わせて編成されるべきであるという哲学に従って、2 年前に MBA コア教育における IT に関するアンケート調査を開始した。この主要な課題がいったん定義されると、ビジネス文脈すなわち学生と教授陣の特別な関心とコンピタンスに応じて事例とケースを変えることによって、コア教育に一貫性と安定性を備えることができる。スターン校のこの調査をもとに、『組織は、なぜ IT 投資に成功したりしなかったりするの？』という次のコア質問が提起された。そこで、ICIS2004 では、ビジネスにおける IT に関するコアビジネス課題は何であるべきかというパネルを行った。MBA コースの内容として、基本的な事項（長期間変化しない事項）と時宜を得た事項を合わせて持つべきだという見解が広く認められた。残った質問は、NYU のコア質問はもっともだが、他の課題もありうるのではないかというものであった。模倣的同型化を避けて、むしろ得意分野を強調して目立たせるべきだと言う意見もあった。

そこで、NYU では、全米のビジネス・スクールの学部長 45 人にアンケート調査を行ったところ、96% が IT に関する講義は重要であるとの回答を得た。しかし、教え方については、

- | | |
|-----------------|-------|
| A 独立した必須科目としている | : 33% |
| B 選択科目でよい | : 9% |
| C 他の科目に含めている | : 28% |
| A と C の両方 | : 30% |

とバラツキていた。

コア教育は前向き（Looking Forward）であること、MBA 学生の訓練には統合思考（Integrative Thinking）が必要であること、不変概念（Invariant Concept）に基づく学習は可能か、といったことがパネルで議論された。

「前向き」に関しては、米国の主要 MBA に、次の二つの新しい動きがある。

コア科目を少なく抑え、学生自らが科目を選択しコースを組める柔軟性を持たせる。

学生が卒業後の長いキャリアに備えるために、一般的な理論を提供する基本的な概念（市場経済学、統計解析、意思決定、問題解決など）を中心に置き、その周辺に前向きなコアカリキュラムを構築する。ビジネス IT は前向き科目の一部になる。

また、ビジネス IT も既に 40 年以上の歴史を持っており、その中に「不変概念」が見出されるようになった。

物事を情報、特にデジタル情報に変換すること。

ハード能力、通信速度、記憶容量、IT 機器の小型化などの性能が持続的に成長するということ。

モジュール形式で構築するソフトウェアが持続的に増加すること。

IS がこのような不変概念を示せれば、研究教育における IS の Identity を確立できるのではないか、というのが結論であった。

（詳細は、<http://archive.nyu.edu/bitstream/2451/14808/1/CEDER-06-08.pdf> を参照）

パネリストの Maryan からは、不変概念の中心は Market Driven ではないかとの意見が出された。

以上